平成３０年度 月刊 サイ 校長通信 11 号

（生徒・保護者版） H31.2.27（２月号）

俊英NOW

●全国スキーインターハイ 長野俊英高校の活躍

佐鳥選手　全国５位の滑り

秋田県で行われた全国大会に３年６組佐鳥一樹君、高橋和花菜さん、小柳一葉君、２年６組大屋ジェシカさんの 4 人が出場しました。佐鳥選手は、男子回転５位、大回転 10 位と全国入賞の快挙を成し遂げました。女子大回転では、高橋選手も 10 位入賞を果たしました。４人の健闘をたたえるとともに顧問の北澤先生、そして富井コーチの指導に感謝します。

校長ESSAY

鳥取県 赤碕高校への道、赤碕高校からの道

今から 15 年も前の話。そのころ私は、長野県教育委員会事務局高校教育課に在職し、県庁 8 階の片隅で、これまでの教員生活とはまったく異質の砂を噛むような事務仕事に辟易しながら日々を過ごしていた。当時長野県は田中康夫知事の時代だった。小説家出身の田中知事は、旧態然とした県政を批判、政治の刷新をめざして奮闘していたが、ウケ狙いのパフォーマンスも多く、県議会との対立もあって県政は混乱していた。高校教育課の課長のポストは、それまで校長級の先生出身者が就いていたが、おそらく田中知事の意向で、はじめて行政職から抜擢されたＴ氏が就任していた。Ｔ氏は、常に無表情、笑顔はほとんどなく、極めて話しかけづらい人物であった。（この人物に反対意見を具申しなければならなくなり、その最中、ストレスから突然目が廻りだし、救急車で搬送されるという大失態を演じた話は、前にこの校長通信で報告したことがある。）

さて、平成 15 年 11 月のこと、私は、昼飯の時間はまだか、などとぼんやり考えながらいつものようにだらだら味気ない仕事を続けていた。すると課長席周辺がにわかに騒がしくなった。何だろう、訝しんでいると、突然、課長席に呼ばれた。課長Ｔ氏は、いつもどおり眉間に皺を寄せ、無表情にじっとこっち見ている。話すのはたいてい隣に座っている課長補佐のＹ氏である。「あした、鳥取県の赤碕高校へ行ってください。」と彼は事務的に言った。赤碕高校なんて聞いたこともない。何で行くのかもまったく分からない。非常に

戸惑ったが、久しぶりに県庁を離れることができるのはうれしかった。

話しは、田中知事が週刊誌『サンデー毎日』の記事を見たところから始まる。その中で鳥取県赤碕高校の特色ある授業が紹介されていた。高塚人志（たかつかひとし）という先生が始めた授業で、体育でのリクレーションゲームを通じて人との触れ合いを学び、さらに保育園や老人福祉施設での長期間の保育・介護体験を通して本当のコミュニケーションの在り方を身につけていくというものだった。「これ、いいじゃない。長野県の高校でもできるんじゃないの。」とかなんとか、知事が言ったらしい。この一言で教育委員会事務局の上層部が大騒ぎになった。とにかく誰でもいいから、話しを聞きに行かせろ。そこで一番ヒマそうな私が呼ばれたというわけだ。知事の意向を先取りして全力でその実現に狂奔（きょうほん）するのが当時の県庁だった。そうしないとみんな県庁から消えていった。思うに独裁政治とは独裁者が行うものではない。独裁者の意向を先取りする取り巻きが遂行するものなのだ。

赤碕町とは、鳥取県の小さな町で、ここまでたどり着くのが大変だった。上田の家を出たのは朝７時、篠ノ井から特急「しなの号」で名古屋まで。新幹線に乗り換え、姫路についた頃は昼になっていた。ここで特急「はくと号」に乗り換えた。特急列車は、山陽から山陰のなだらかな山地をいっきに越えていく。鳥取を過ぎ、終点の倉吉に到着、ここからさらに各駅停車のローカル列車に乗り換えてようやく赤碕駅にたどり着いたのが４時半、家を出てから９時間半が経っていた。

赤碕高校高塚人志先生、大変な教育困難校だった赤碕高校をユニークなコミュニケーション授業で立ち直らせたスーパーカリスマ体育教師である。「田中知事が『サンデー毎日』読んでくれましたか。ありがたいですわぁ。」から話しが始まり、それから２時間、彼は機関銃のようにしゃべり続けた。「生徒が言うんですよ。先生、いい仕事してはるわ。もうたまりまへんなぁ。」「これが日本全国で行われたら、もう大変なことになりまっせ。」･･･

私は圧倒され、毒気に当てられ、長旅の疲れも加わって、赤碕高校を後にしたときには気絶寸前になっていた。その夜、夕食では大して飲んでもいないのにかなりの悪酔いをしたのだ。長野に帰って赤碕高校の報告をすると、続いて高校教育課長以下のお歴々が赤碕高校に飛んだ。「飛んだ」のである。「何で俺のときは飛行機じゃないんだ」という私の心の叫びには、誰も気付いてくれなかった。高塚先生を長野に招いて、県庁講堂で講演も行われ、事業は一挙に進んでいった。赤碕高校のコミュニケーション授業は、その後、東部高校（現東御清翔高校）に導入されることになり、大きな成果をあげたと聞いている。

実は、私が赤崎高校に赴（おもむ）いた頃、東部高校の校長は和田英武先生だった。和田先生は、当時さまざまな改革を果敢（かかん）に推進し、東部高校の難しい課題解決に奮闘していた。赤崎高校の授業実践をまず、東部高校に導入することになったのには、こうした背景があったのである。和田先生は、今、長野俊英高校でカウンセラーとして生徒相談に当たっている。まさか、和田先生と同じ学校で働くことになるとは思わなかった。････つくづく思うのだが、人の縁とは、不思議なものである。